

酪農マン

宰府 俤

何かの手ちがいで2月号に、3月号にのせたいと思っていた原稿がのっており、此の頁をくった人は何だか変だと気附かれたと思う。1頁にのった2つの酒の稿には1ヶ月の時の流れがあるものとお考え願えれば幸いです。

全く、くだらないラクガキではあるけれども、酒が入らないと筆が進まない悪癖のため、次号にのす原稿を書かねばならないと思えば、いささか戸惑い気味である。勿論書かなければならない筋合いのものではないので、筆が進まねば筆をすて酒と共にその所作と絶縁すればよいわけである。

しかし、本誌編修担当のSさんとは、いまは自衛隊の駐屯している三軒屋で1ヶ年間、四軒長屋の隣組で大いにお世話になり、しばしば酒の同好会を催し時たま人さわがせ等して随分御迷惑をおかけし、今更アルコールが溶脱した手に筆がとれない等と申し上げたのでは男の意地が立たぬと考えている次第。

よってかくかく件(クダン)の如しである。それにしても、アルコールの助力を受けないとラクガキもできそうにない。

寒風と小雨の2月初旬の3日間、美作集約酪農地域の畜産関係普及員の特技研修が、酪農試験場で催されたがその最終日一盃の酒に研修と集いの好機を喜び、更には再び夫々の任地に別れ去り行く友の幸を希う宴が開かれた。

そうしてささやかながら(修飾語がまずい?)血脈の通じた酒盃が配られたその瞬間、ギラギラと輝くコハク色の液は得も言えぬ魅惑の境をくりひろげその手をこまねき、全く己れの去就何処にと迷わずにいられなかった。

禁酒を誓う一人の人間の周囲に繰りひろげられるバカスの幻惑的な跳舞は、禁男の園にあそぶ天衣無縫の美女を眺むるに似てまこと残忍なるものである。意志薄弱自制心に乏しく多分に卑屈な徒党的な感情に身をあやつられる小人は、ままよと幾度か左右の両手が動いたものである。

酒の絶縁状が印刷屋の片隅に放げられていれば幸、

此の欲望を満たしかくも四苦八苦の筆使いをせずにするものを。偶然は悲願をとまなうものか、実は此の日昼前ついに絶縁の運命がとりまいたのである。同席のUなる先人の声は地獄にわめくサタンのそれに似て、ようやく酒席から遠ざかり得たのである。

幻夢の境に迷う一瞬時は青空に浮く一片の白雲が太陽をささぎりて去るが如くにすぎさり一己れの力によって果し得ない余りに弱い意志に支えられた彼が、酒をたつに選ぶ最後の途は自体の破壊を待つか、或は外部から拘束をうける環境を作る以外になく、そうしてその後者の途を選んだ彼は一見事、最初の関門を通り抜けたのである。

お嬢さん達が津山の町から運んでくれる食パンに、美作集約酪農地域の基幹工場製のバターを塗り、モダンでスマートな新装の牛舎に憩う乳牛の乳をのみ、気俤な男の一人の生活にはいささか面倒ながら一日の一食を酪農食とし、体を張って酪農マンのつもりでいる。

しかし、一日三度の食事のあと40分に頂く一服の白粉に余計なものだと、きっとUさんは言うだろう。

胃病ヤミ故に酪農食をとれとすすめたのがUさん御夫妻であれば、そして酪農マンのメッキはすぐにはがれるかも知れない。

今宵ブルハウスにたむろす面々は夫々の方面に姿をくらし、ただ一人コタツを相手に1枚200のマスに下手な字を埋めている。ぐずついた真冬の夜闇は滅法暗く、時折り時雨のたたく音に淋しさ一入である。

つい此の間、岡山の友が無聊をなぐさめにわざわざ持って来てくれたウイスキーが机の片隅で、いまにも跳り出しそうな恰好をしている。(2月9日記)